

〔研究ノート〕

ドラヴィダ諸語の学習のための辞書サイトの作成

箕原辰夫

1. はじめに

中部インドから南インドにかけては、ドラヴィダ諸語 (Dravidian Languages) ^[1, 2] と呼ばれるタミル語を中心とした文法構造を持つ一連の言語が公用語としても用いられている。その主要な言語は、タミル語 (Tamil)、マラーヤラム語 (Malayalam)、カンナダ語 (Kannada)、テルグ語 (Telugu) の4つの言語である。それぞれの言語の話者数は、タミル語が約7400万人、マラーヤラム語が約3600万人、カンナダ語が約3500万人、テルグ語が約7000万人になっており、合わせて2億人を超える話者がこのドラヴィダ諸語を母国語としている ^[3, 4, 5]。それぞれの言語が話されている地図を図1に示した。

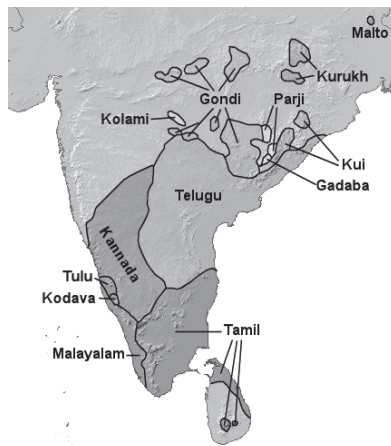


図1 ドラヴィダ諸語が公用語として話されている州 ⁽¹⁾

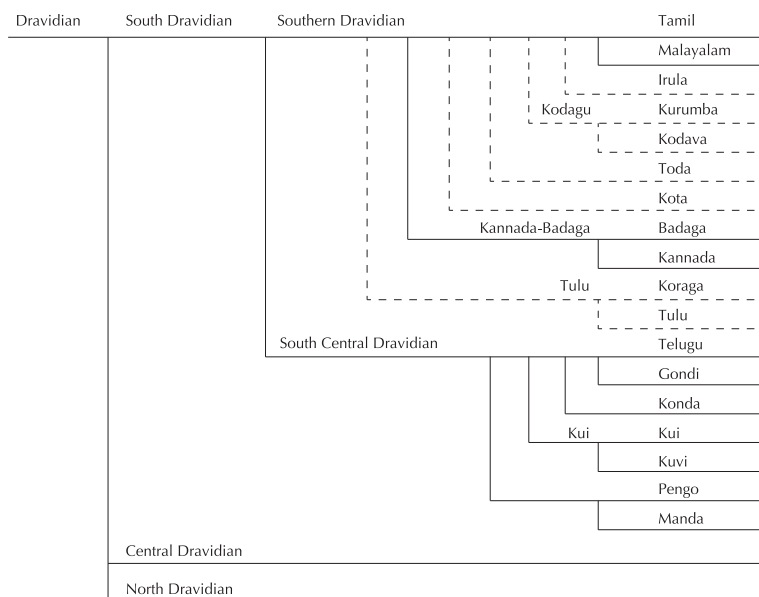
しかしながら、2013年に科学研究費を用いて現地に赴いたところ、一般市民の母国語への関心はそれほど高いようには思えなかった。一般の書店では、ドラヴィダ諸語に関する書籍やドラヴィダ諸語で書かれた書籍などはほとんど販売されていない。書籍のほとんどは、英語で記述されたものであり、その内容も情報技術に関するものが多かった。これは、南インドの地域においても、経済的な自活を得るためには、情報技術を習得し、英語でコミュニケーションできる能力が必要とされることを反映したものではないかと推察される。そのため、自分の母国語に関する関心や研究は、それ比べれば相対的に価値が

(1) 原図は、https://en.wikipedia.org/wiki/Dravidian_languages より引用し、切り取り加工

小さいものと見なされているのではないだろうか。今後、ある程度南インドの人々の暮らしが豊かになれば、そのような人文的な方向にも一般の人々の関心が向けられるであろうが、現段階では、他国の人々が英語で書いた文献の方が、ドラヴィダ諸語の足掛かりになるという状態に陥っている。もちろん、南インドの大学の中においては、ドラヴィダ諸語の研究もなされており、成果も出ているが、特に訪れた中ではマラーヤラム語やカンナダ語に関しては、タミル語から派生して作られた言語でもあり、その歴史もタミル語に比べれば浅いのであるが、自分たちの話す言語よりも別の部分に人々の関心が向けられているのを感じた。

ドラヴィダ諸語においては、圧倒的な歴史を誇るのはタミル語であり、タミル語の古い文献は6世紀に遡ることができる。図2に示すように、タミル語から早い段階でテルグ語が派生してできており、早い段階での分離のために、タミル語よりもヒンディー語(Hindi)の影響の方を大きく受けている。また、テルグ語は南中東部のアーンドラ・プラデーシュ州およびテランガーナ州(2014年に分離され、両州ともにハイデラバードを州都とする)で話されており、南端のタミル・ナードゥ州やケーララ州とは異なる文化圏に入るのではないかと考えられる。2013年に訪れたときには、ハイデラバードには行けなかったこともあり、今回の研究ではテルグ語は除外することにした。ドラヴィダ諸語でもタミル語・マラーヤラム語・カンナダ語は、南部ドラヴィダ語族⁽²⁾として分類されており、3つの言語を扱うのは分類上でも1つにまとまっている。図2に示すように、マラーヤラム語とカン

図2 ドラヴィダ諸語の系譜と派生⁽³⁾



(2) 日本語 Wikipedia においては、Dravidian Languages を「ドラヴィダ語族」、South Dravidian Languages を「南部ドラヴィダ語派」と訳しているが、本稿ではそれぞれ「ドラヴィダ諸語」および「南部ドラヴィダ語族」と訳することにする。

(3) 参考文献 [3] を参照して作成、北部・中央部に関しては各言語名を省略

ナダ語が派生分離したのはかなり遅くなっている。そのために、文法や基本語彙の発音については、タミル語と似通っている部分もある。しかしながら、両言語はサンスクリットやイスラム教からアラビア語などの影響を色濃く受けており、その部分の語彙や発音も重要な言語形成の一部を担っている。

北インドでの公用語であるヒンディー語と比べて、ドラヴィダ諸語やその代表であるタミル語は日本人には馴染みが薄い。また、日本語でのタミル語の教科書と呼べるものも限られている。マラヤーラム語やカンナダ語に関しては、絶版のものがほとんどで皆無と言ってよい状況にある。故大野晋氏が、タミル語と日本語との関係に関する主張、すなわち日本語や琉球言語の祖語あるいはクレオール祖語としてタミル語が該当するのではないかという主張をしたため、その主張を検証する本が大野氏の著作として何冊か出されているが、却ってそのことによって、タミル語そのものについての教科書が出せない状況が続いたという観測もあり、通常のタミル語や南部ドラヴィダ語族を学ぶ機会が喪失されてきたのではないだろうか。

日本のインドのイメージは北インドのものがほとんどであり、南インドのドラヴィダ語族に属するいずれかの語を話す素朴なインド人とより深く交流することによってインド人のイメージが変わる可能性もある。実際に訪問してみると、南インドのインフラストラクチャは、あまり良いと言える状態ではなく、これから発展する途上にあるが、北インドのように階層化と貧富の差は激しくなく、ある程度緩やかな格差状態であるように見受けられた。南インドの人々を支援することが今後の日本にとって良い相互作用を齎すものと考えている。

学習者は、文字も学ばなければならないが、ドラヴィダ諸語の辞書や英語で書かれた教科書は、原典とされるドラヴィダ諸語語源辞典^[1]と同様にローマ字およびいくつかの拡張されたローマ字だけで記述されているものもある。文字を習う手間を省略するためのものと思われるが、辞書の形態としては、それぞれの文字と拡張されたローマ字の両者を併記する形で行なうべきであるし、また学習書としても両者を併記する形で行なった方が、読む分量は多くなってしまいが、文字への抵抗が少なくなると思われるので、両者併記の形とした。

文法的な典拠は、ドラヴィダ諸語に書かれた参考書^[2, 3, 4, 5]に則り、各言語についてもタミル語^[6]、マラヤーラム語^[7]、およびカンナダ語^[8]の参考書を参照した。加えて、タミル語については、口語タミル語と文語タミル語で発音などの違いがあるので、これについてもタミル口語について書かれたテキスト^[9]を参考にした。

2. ドラヴィダ諸語の音節文字と系譜

ドラヴィダ諸語の中では最古の歴史を持つタミル語の文字であるタミル文字 (Tamil script) は、「紀元4～5世紀に北インドで用いられたブラーフミー文字 (Brahmi script) をその源とする。また同様に南インドでサンスクリットを表記するため歴史的に用いられてきたグランタ文字 (Grantha script) と並行的に発展進化してきたという経緯があり、両

者には非常に多くの共通点がある。」⁽⁴⁾ という指摘があるように、南部ドラヴィダ語族では5世紀頃に成立したグランタ文字を共通の祖先としている。ブラーフミー文字を起源として持つのは、北部インドで用いられているヒンディー語のディーバナーガリー文字 (Devanagari script) と同様である。このグランタ文字からタミル文字が8世紀頃に、マラヤーラム文字 (Malayalam script) が11～12世紀頃に派生している。ただし、グランタ文字そのものは使用されなくなっている。カンナダ文字 (Kannada script) に関しては、ブラーフミー文字が、インド中南部のデカン高原で自体が変化して5世紀頃にカダンパ文字 (Kadamba script) ができ、これが筆記用具の変化により曲線化していき、テルグ・カンナダ文字 (原カンナダ文字: Old Kanarese script) が9世紀頃に成立したとされている。言語と同様に文字もカンナダ文字やマラヤーラム文字では、北方のサンスクリットの影響を色濃く受けている。

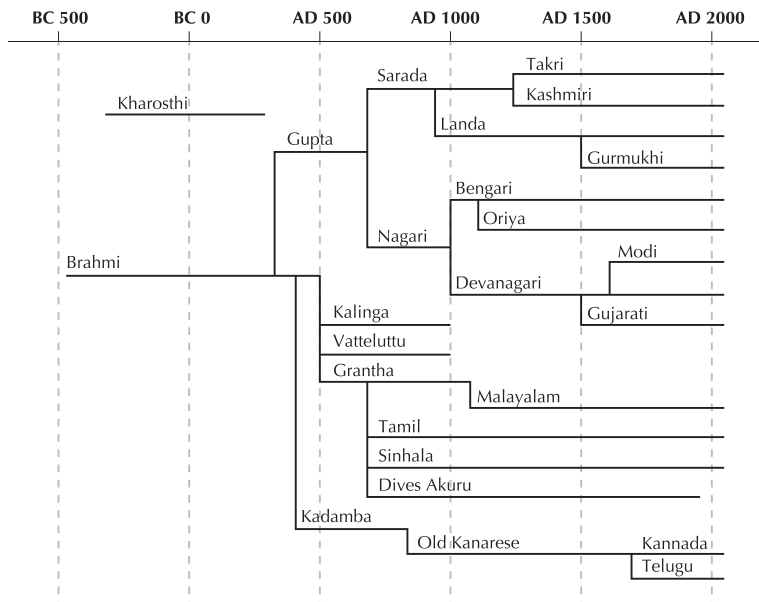


図3 ドラヴィダ諸語の文字の系譜⁽⁵⁾

ブラーフミー文字を祖とするインドの文字は、アブギダ文字 (abugida) という分類に入る。これは、子音を中心とする文字体系で、母音記号を子音のまわりに配置するというものである。ハングル文字のように、子音記号と母音記号が対等に組み合わせられる文字であれば、音節文字 (syllabary) と呼ばれるが、アブギダ文字についても1つの文字が表わすのは音節であり、音素である子音そのものを表わす場合には特別な記号が用いられる。

以下の2つの表は、タミル文字・マラヤーラム文字・カンナダ文字の母音の独立形とカ行 (子音のkで始まる行) の音節文字を記したものである。長音については、アッパーバーの形で表わした。母音はaからoの5音に、各母音の長音、そして二重母音のai, auであわ

(4) Wikipedia「タミル文字」より (<https://ja.wikipedia.org/wiki/タミル文字>)

(5) ancientscripts.comのSouth Asian writing systemsを参照http://www.ancientscripts.com/sa_ws.html

せて12の母音が使われている。これらの文字の形から考えるとタミル文字とマラヤーラム文字が似ているのがわかる。また、ここには掲載していないが、原カンナダ文字から派生したテルグ文字とカンナダ文字は相互に似ている。

表1 タミル文字・マラヤーラム文字・カンナダ文字の母音 (独立形)

	a	ā	i	ī	u	ū	e	ē	ai	o	ō	au
Tamil	அ	ஆ	இ	ஈ	உ	ஊ	எ	ஏ	ஐ	ஓ	ஔ	ஔ
Malayalam	അ	ആ	ഇ	ഈ	ഉ	ഊ	എ	ഈ	ഈ	ഓ	ഔ	ഔ
Kannada	ಅ	ಆ	ಇ	ಈ	ಉ	ಊ	ಎ	ಏ	ಐ	ಒ	ಓ	ಔ

表2 タミル文字・マラヤーラム文字・カンナダ文字の音節 (カ行)

	k	ka	kā	ki	kī	ku	kū	ke	kē	kai	ko	kō	kau
Tamil	க	கா	கா	கி	கி	கு	கூ	கெ	கே	கை	கொ	கோ	கௌ
Malayalam	ക	കാ	കാ	കി	കീ	കു	കൂ	കെ	കേ	കൈ	കൊ	കോ	കൗ
Kannada	ಕ	ಕಾ	ಕಾ	ಕಿ	ಕೀ	ಕು	ಕೂ	ಕೆ	ಕೇ	ಕೈ	ಕೊ	ಕೋ	ಕೌ

南部ドラヴィダ語族の文字では、子音記号に母音記号を付加するだけでなく、特定の母音においては、形そのものが変化する場合がある。マラヤーラム文字が規則的なものに対して、タミル文字にその傾向が甚だしく、母音の「ウ：u」段の音を主体にして文字字体の変化が見受けられる。カンナダ文字の場合は更に複雑で、各子音と各母音記号の組み合わせで、細かな字形の変化があり、すべての規則を憶えるのは難しい。

表3 タミル文字におけるウ段の変化

	k க்	ṅ ங்	c ச்	ñ ஞ்	ṭ ட்	ṇ ண்	t த்	n ந்	p ப்	m ம்	y ய்	r ர்
u	கு	ங்	சு	ஞ்	டு	ணு	து	நு	பு	மு	யு	ரு
ū	கூ	ங்	சு	ஞ்	டு	ணூ	தூ	நூ	பூ	மூ	யூ	ரூ

	l ல்	v வ்	ḷ ழ்	l ள்	r ர்	ṇ ண்	j ஜ்	ṣ ஷ்	s ஸ்	h ஹ்	ks க்ஷ்
u	லு	வு	ழு	ளு	று	ணு	ஜு	ஷு	ஸு	ஹு	க்ஷு
ū	லூ	வூ	ழூ	ளூ	ரூ	ணூ	ஜூ	ஷூ	ஸூ	ஹூ	க்ஷூ

表4はタミル文字・マラヤーラム文字・カンナダ文字の子音の文字を記したものである。子音については、日本人が区別しない音があるのでわかりにくいですが、翻字にhがついているものは、有気音で、日本語の促音が激しくなったものとも考えられる。また、下にドット

がついている翻字は、反り舌音になっている。ただし、śとlは、摩擦音になっている。ñは軟口蓋鼻音（「オンガク」の「ン」の音）で、ṅは硬口蓋鼻音（「ニャ・ニユ・ニョ」で用いる音）である。r̥とl̥は、それぞれ、反り舌弾き音と反り舌接近音である。実際に話者に発音してもらったが、rやlのアルファベットがついた音については聞き分けがほとんどできなかった。また、これらの音の中にはdとrの子音との中間のように聞こえる音もあった。śやśの子音は、日本語では「シュ」の子音に近いと考えて良い。

表4 タミル文字・マラヤーラム文字・カンナダ文字の子音

	k	kh	g	gh	ñ	c	ch	j	jh	ṅ
Tamil	க				ங	ச		ஜ		ஞ
Malayalam	ക	ഖ	ഗ	ഘ	ങ	ച	ഛ	ജ	ഝ	ങ
Kannada	ಕ	ಖ	ಗ	ಘ	ಙ	ಚ	ಛ	ಜ	ಝ	ಞ

	t̥	th	d	d̥h	ṇ	t	th	d	d̥h	n
Tamil	த				ண	த				ந
Malayalam	ട	ഠ	ഡ	ഢ	ണ	ത	ഠ	ദ	ഢ	ന
Kannada	ಟ	ಠ	ಡ	ಢ	ಣ	ತ	ಠ	ದ	ಢ	ನ

	p	ph	b	bh	m	y	r	l	v	
Tamil	ப				ம	ய	ர	ல	வ	
Malayalam	പ	ഫ	ബ	ഭ	മ	യ	ര	ല	വ	
Kannada	ಪ	ಫ	ಬ	ಭ	ಮ	ಯ	ರ	ಲ	ವ	

	ś	ṣ	s	h	l̥	l̥	r̥	ṅ	kṣ	śri
Tamil		ஷ	ஸ	ஹ	ள	ழ		ன	க்ச	ஸ்ரீ
Malayalam	ശ	ഷ	സ	ഹ	ള	ഴ	റ			
Kannada	ಶ	ಷ	ಸ	ಹ	ಳ	ಱ	ಱ			

表4からもわかる通り、マラヤーラム語とカンナダ語は、北インドのヒンディー語の影響を受けているために、ヒンディー語の子音を表わすための文字が用意されている。なお、ここには掲載されていないが、その影響を受けた二重子音を表わすための文字の変形が各

子音に用意されている。異端はタミル語の方で、それらの子音を表わす文字が用意されていない。また、他の2つの文字にはない独自の子音を表わす文字が用意されている。加えて、他の2つの文字にあるような二重子音を表わすための文字の変形はない。

本稿で作成する辞書では、子音の翻字としては、一般に用いられているものと、国際音声字母を用意するものとした。なお、3つの言語には、それぞれ他にも字の綴りに関する細かな規則があるが、本稿では分量的に割愛する。

3. 学習辞書としての構成について

辞書としては、検索が可能なドラヴィダ諸語語源辞典^[1]のオンライン版の他に、歴史的なタミル語の辞書^[10]、マラヤーラム語の辞書^[11, 12]およびカンナダ語の辞書^[13]が、インターネット・アーカイブ上でも公開されている。しかしながら、一般販売されている辞書で、ドラヴィダ諸語として統一されているものは、Collinsのシリーズ以外にない状況になっている。そこで、語彙の選定は、CollinsのMy First English-English-Tamil / Malayalam / Telugu / Kannada Dictionary^[14, 15, 16, 17]の英語で書かれている辞書項目で統一し、それに各言語について、いろいろな参考書に出ている項目を付加する形にした。2013年に現地へ赴いて、話者に単語の発音を録音したときには、各参考書の項目で録音したために、それぞれの単語について発音が付加されていないものもある。単語の数としては、現在のところ各言語で3,000語ぐらいになっている。

単語の録音のときに用いた、袋井のタミル語の教科書^[18]の単語については、口語タミル語の綴りで書かれているものがいくつかあり、現地の話者によって、文語の方に修正された。テルグ語を除く、タミル語、マラヤーラム語、カンナダ語の南ドラヴィダ語族の主要3言語について、それぞれの音節の発音についての録音、そのときの手持ちの辞書を用いた録音を利用して、必要な音節や単語では話者の音を聴けるように工夫した。また、同じ音節や単語について、複数の話者で録音したものについては、各単語で話者を選べるようにする予定である。

辞書の単語の項目は、基本的には以下のような形で構成されている。単語検索では、これらのいずれの項目においても部分一致で検索できるように実装する。複数の項目に入力された場合は、すべての項目に該当するものだけを検索する。

- ・ 項目の識別子
- ・ 項目のタイトル (各言語の文字, 拡張ローマ字による翻字)
- ・ 文字の読み方 (国際音声字母, 日本語のカナ, 話者の録音)
- ・ 単語の品詞
- ・ 単語の意味
- ・ 単語の分類リスト
- ・ 単語を用いた熟語

単語の分類リストについては、その単語のもつ意味領域を複数持てるようにした。単語の分類は、シソーラス (thesaurus) や用語の木 (word tree) の中で行なっているようなグ

ループ分けであり、日本語類義語辞典^[19, 20]で定義されている十進分類方式による「語彙分類体系表」に基づいた。加えて、単語が抽象的な概念を表わすものではない具象的な意味を持つ場合、日常生活のどのような場面で用いられるのかについても、分類できるものは分類した。

また、単語からは、次のようなリンク（他の単語項目や説明文・例文の識別子で記述する）を出すようにして、必要なものはリンク先からデータを引いてきて、その項目の併せて表示するようにしている。

- ・各字音の構成へのリンク
- ・その単語を用いた挨拶などの基本的なフレーズへのリンク
- ・基本的な文法規則へのリンク
- ・名詞・代名詞の場合、それぞれの格へのリンク
- ・動詞の場合、時制による活用形や格変化へのリンク
- ・文法規則の詳細へのリンク
- ・反対語へのリンク
- ・上位概念（分類リストによる）に属する基本語彙（類義語）へのリンク

これらのリンクを用いると単語間は複雑なネットワーク構造を形成するが、このリンクのいくつかを利用すれば、以下のような単語リストのビューを考えることができる。

- ・一定の文字で始まる単語リストのビュー
- ・各品詞のすべての単語リストのビュー
- ・日常生活の各場面で用いる単語リストのビュー
- ・分類リストによって分類された1つの分類に属する単語リストのビュー
- ・1つの単語について、それぞれの言語での単語リストのビュー

これらのビューはまだ実装していないが、これから実装をする予定にしている。また、ビューの他に、単語の定着率を高めるためのドリル的なものを用意する予定である。たとえば、1週間の各曜日は、どれにあたるなどを選択させるものや、数の標記などを選択させるようなものなどが考えられる。話者の音声と共に解答が提示されれば、学習効果は上がるものと推測される。

4. 実装について

学習辞書のWebサイトは、どのプラットフォームのWebブラウザでも表示が行なえるように、JavaScript言語、HTMLおよびCSS (Cascade Style Sheet) だけを用いて開発を行なった。そのため、閲覧者のコンピュータでは、タミル文字・マラヤーラム文字・カンナダ文字のUnicodeのフォントがインストールされていることを前提としている。



図4 Webサイトのホームページ

辞書のデータについては、以前ラテン語のときに行なったように、XMLで記述し、Webページに付加されているJavaScriptでそのデータを読むようにした。実装したものは、学内に立てた個人サーバーにおいて、以下のURLにおいて公開する予定にしている。

<http://marine.pi.cuc.ac.jp/dictionary/draavidian>

5. 終わりに

辞書の編纂には長い時間が掛かる。この研究に取り組み始めてから、報告するまでには長い時間を要している。それでもWebで公開するものは、未完成であるし、これからも時間を掛けて取り組む必要がある。個人的な興味は、書字 (scripting system) にあり、図3で示した文字の系譜、言語の書記としての文字を中心にこれからも南インドの言語・文字に対しての研究を続ける予定である。特に日本人にとっては、インドの母音と日本語の5つの母音が共通であること、インドの母音記号は長音を明確に区別して記述されることなどを考えると、西洋のアルファベットや子音中心のアラビア系の文字に比べれば馴染みやすいのではないか。この研究が日印の文化的な交流の一助になることがあれば幸いである。今回は、Webページでの実装にしたが、これをiPhoneやAndroid用のアプリケーションとして実装しなおすことも予定している。Webページよりも、スマートフォンのアプリケーションの方が、ローカルに使用することもできるし、ユーザに馴染みやすいと考えられる。特に、ドリル的な内容を入れる場合には、アプリケーションの方が受け入れられやすいのではないかと考えている。最後に、この研究は、2011年～2013年の期間、日本学術振興会の科学研究費の助成を受けた (課題番号：23520697)。助成に関して謝辞を申し上げる。

また、録音について、シンガポールでのタミル語の話者の手配をして下さったシンガポール国立大学のSUBRAMANIAN THINNAPPAN教授、および南インドにおいてタミル語・マラヤーラム語・カンナダ語の話者を手配して下さいましたパラダイスツアーに謝辞を申し上げます。

参考文献

- [1] Thomas D. Burrows and Murray Barnson Emeneau, *Dravidian Etymological Dictionary*, Munshiram Manoharlal Publisher, pp.640, ISBN: 978-8121508568, 1961 reprinted in 1998,
online-version: <http://dsal.uchicago.edu/dictionaries/burrow/>, based on 2nd edition 1984.
- [2] Robert Caldwell, *A comparative grammar of the Dravidian or South-Indian family of languages*, London: Harrison, pp.548, 1856,
online-version: <https://archive.org/details/cu31924023009966>.
- [3] Bhadriraju Krishnamurti, *The Dravidian Languages*, Cambridge Language Surveys, Cambridge University Press, pp. 576, ISBN: 978-0521025126, 2006.
- [4] Mikhail Sergeevich Andronov, *A Comparative Grammar of the Dravidian Languages*, Beiträge zur Kenntnis südasiatischer Sprachen und Literaturen vol.7, Otto Harrassowitz Verlag, pp.334, ISBN: 978-3447044554, 2003.
- [5] Sanford B. Steever editor, *The Dravidian Languages*, Routledge, pp.454, ISBN:978-0415412674, 1998 reprinted in 2006.
- [6] R.E. Asher and E. Annamalai, *Colloquial Tamil: The Complete Course for Beginners*, Colloquial Series, Routledge, pp.322, ISBN: 978-1138960343, 2015.
- [7] Mikhail Sergeevich Andronov, *A Grammar of the Malayalam Language in Historical Treatment*, Beiträge Zur Kenntnis südasiatischer Sprachen Und Literature vol.1, Otto Harrassowitz Verlag, pp.212, ISBN: 978-3447038119, 1996.
- [8] F. Kittel, *A grammar of the Kannada language in English: comprising the three dialects of the language (ancient, mediæval and modern)*, Basel Mission Book & Tract Depository, Mangalore, pp.500, 1905,
online-version: <https://archive.org/details/grammarofkannada00kittuoft>.
- [9] Harold F. Schiffman, *A Reference Grammar of Spoken Tamil*, Reference Grammars series, Cambridge University Press, pp.256, ISBN: 978-0521027526, 2006.
- [10] Miron Winslow, *A comprehensive Tamil and English dictionary*, New Delhi : Asian Educational Services, pp.974, 1862,
online-version: <https://archive.org/details/winslowscomprehe00mwin>.
- [11] Hermann Gundert, *A Malayalam and English Dictionary*, Trübner & co, pp.1159, 1872,
online-version: <https://archive.org/details/amalayalamanden00gundgoog>.
- [12] C. Stolz, *School Dictionary English And Malayalam*, Basel Mission Book & Tract Depository, Mangalore, pp.370, 1870, online-version:
https://archive.org/details/1870_School_Dictionary_English_And_Malayalam.

- [13] J. Bucher and F. Kittel, *A Kannada-English school-dictionary*, Basel Mission Book & Tract Depository, Mangalore, pp.478, 1899,
online-version: <https://archive.org/details/kannadaenglishsc00buchrich>.
- [14] Collins, *Collins My First English-English-Tamil Dictionary*,
Collins First series, HarperCollins, pp.160, ISBN: 978-0007415649, 2011.
- [15] Collins, *My First English-English-Malayalam Dictionary*,
Collins First series, HarperCollins, pp.160, ISBN: 978-0007415663, 2011.
- [16] Collins, *Collins My First English-English-Telugu Dictionary*,
Collins First series, HarperCollins, pp.160, ISBN: 978-0007438655, 2011.
- [17] Collins, *Collins My First English-English-Kannada Dictionary*,
Collins First series, HarperCollins, pp.160, ISBN: 978-0007438624, 2011.
- [18] カルパナ・ジョイ, 袋井由布子, 『タミル語入門』, 南船北馬舎, pp.160, ISBN: 978-4931246225, 2007.
- [19] 大野 晋, 浜西 正人, 『角川類語新辞典』, 角川書店, pp.932, ISBN: 978-4040117003, 1981.
- [20] 大野 晋, 浜西 正人, 『類語国語辞典』, 角川書店, pp.1309, ISBN: 978-4040120003, 1985.
(2017.8.28 受稿, 2017.9.20 受理)

〔抄 録〕

ドラヴィダ諸語の中で、南部ドラヴィダ語族に属するタミル語・マラヤーラム語・カンナダ語に関しての比較も行なえる形で、学習辞書のWebサイトを作成した。このWebサイトの中では、それぞれの言語の単語を検索できる他、日本語から各言語の単語に翻訳することも可能になっている。また、基本的な語彙についての問題出題もできるようなページも用意した。このWebサイトは、どのプラットフォームのWebブラウザでも表示が行なえるように、JavaScript言語、HTMLおよびCSSだけを用いて開発を行なった。この研究ノートでは、その概要とともに辞書編纂の途中で問題になってきた項目について考察する。この研究は、2011年～2013年の期間、日本学術振興会の科学研究費の助成を受けた(課題番号：23520697)。